

The Well-Beloved 論

山 根 久之助¹

(1998年11月13日受付, 1998年11月30日受理)

On *The Well-Beloved*

Kyunosuke YAMANE¹

(Received: November 13, 1998. Accepted: November 30, 1998)

I. 作品の特色

この作品の特色は、主人公 Jocelyn Pierston が、Avice という祖母、母、孫娘の3人とも同名の女性に恋をするという奇想天外な状況の設定である。作者 Thomas Hardy は、この作品への序文でこの点について以下のように述べている。

As for the story itself, it may be worth while to remark that, differing from all or most others of the series in that the interest aimed at is of an ideal or subjective nature, and frankly imaginative, verisimilitude in the sequence of events has been subordinated to the said aim.¹⁾

つまり、この作品を書いた作者の関心事は「非現実的あるいは、主観的であり、率直に言えば空想的であること」であって、事件の展開の「本当らしさを出すこと」は二の次だと述べられているのである。確かに、この物語の筋の展開はいかにも荒唐無稽である。それは、以下の梗概を見れば明らかであろう。²⁾

主人公 Jocelyn Pierston が20才の時、結婚を申し込んだ Avice Caro (以後 Avice 1世と呼ぶ) は、他の男と結婚して1女を産み育てて死ぬ。20年後その訃報に接し、上流社交界のパーティに出席していた彼はすぐ故郷の島に戻る。そこで見かけた若い女性が Avice 1世の娘 Ann Avice Caro (以後 Avice 2世と呼ぶ) であったが、Jocelyn Pierstonはすぐ彼女の美しさに引かれ、40才にして彼女を恋するようになる。しかし Avice 2世は既に他の男と結婚した身であったことが後に分かる。Avice 2世が女の子を産み、法的に結婚していた男と再び生活ができるようにしてやった後、彼の彫刻家としての生活がさらに20年間続き、60才になった Jocelyn Pierston は、Avice 2世から島に戻って来て欲しいとの便りを2度も受け取る。再会した Avice 2世と話しているうちに、昔の恋心とは違うが、Avice 2世に対して優しい気持ちになる。しかし、彼が遠くから見かけた Avice 2世の娘 Avice Pierston (以後 Avice 3世と呼ぶ) に恋するようになる。

このように20才、40才、60才に、故郷の島の3人の女性、しかも祖母、母、孫娘を恋するようになるのは、Jocelyn Pierston の中の the Well-Beloved によるものだとされている。本論ではこの the

1 高知女子大学文化学部文化学科

Department of Cultural Studies, Faculty of Cultural Studies, Kochi Women's University

Well-Beloved とは何かについて考察し、さらに、Jocelyn Pierston も避けて通ることの出来なかった老化の問題と the Well-Beloved との関連を考える。それを通して、この作品から何を読み取れるのか考察して見たい。

II. the Well-Beloved とは何か

作品の中では the Well-Beloved について様々な説明がなされている。これらの説明について、いくつかの角度から検討を加え、the Well-Beloved とは何かを考えて見たい。

(1) Jocelyn Pierston の the Well-Beloved と Avice 2 世の the Well-Beloved の相違

Avice 2 世に惹かれている40才になる Jocelyn Pierston は、Avice 2 世から予想もしていなかったことを知らされ驚愕する。Avice 2 世は彼に次のように明かす。

'Then I will tell you,' she said quite seriously. "Tis because I get tired of my lovers as soon as I get to know them well. What I see in one young man for a while soon leaves him and goes into another yonder, and I follow, and then what I admire fades out of him and springs up somewhere else; and so I follow on, and never fix to one. I have loved *fifteen* a'ready! Yes, fifteen, I am almost ashamed to say,' she repeated, laughing. 'I can't help it, sir, I assure you. Of course it is really, to *me*, the same one all through, only I can't catch him!' She added anxiously, 'You won't tell anybody o' this in me, will you, sir? Because if it were known I am afraid no man would like me.' (II.-viii.)³⁾

彼女が男性を好きになっても、間もなくその男に愛想が尽き、別の男に惹かれるという繰り返して、これまで15人もの男性を恋してきたと聞き、彼はこの娘が、自分がこの20年間繰り返してきたのと同じことをしていたと知る。そして、皮肉にも、彼も彼女が好きになるが、捨てた15人の男の1人に過ぎなかったのだと悟らされる。この20年間、多くの女性たちに与えて来た苦しみを、今度は自分が、故郷の島のこの娘から嘗めさせられることになったのである。

しかも、彼女の性癖は、「それは勿論、私には本当にいつもずっと同じものなんです。ただ、どうしても掴めないんです」'...Of course it is really, to *me*, the same one all through, only I can't catch him!' と彼女が語ることを聞けば、まさに彼自身の the Well-Beloved そのものである。

しかし、作者は Jocelyn Pierston の the Well-Beloved と Avice 2 世の the Well-Beloved に相違があるように描いている。つまり、Avice 2 世の the Well-Beloved は、上述のように、現実社会の男女の恋愛関係だけにほぼ限定されているのに対し、Jocelyn Pierston の場合は、それが、男女の恋愛関係だけに限定されず、さらに芸術的な美の追求という意味合いが、付加されているのである。同じ島の出身でもある Marcia Bencomb をホテルに届けてから友人の Somers を訪れ、彼は次のように言う。

'I am under a curious curse, or influence. I am posed, puzzled and perplexed by the legerdemain of a creature—a deity rather; by Aphrodite, as a poet would put it, as I should put it myself in marble....' (I.-vi.)

Jocelyn Pierston にとって、the Well-Beloved は、美の女神 Aphrodite のようなもので、彫刻家としての彼の創作意欲を掻き立てるのである。故に、Marcia Bencomb が去った後、彼はその情熱を芸術活動に注ぎ、容易に A. R. A (英国王立美術院会友) になる。

Jocelyn Pierston にとって、the Well-Beloved は、男女の性愛とは直接結び付かないようである。Avice 2 世の葬儀を引き受けねばならない羽目に陥り、島人の目を気にする彼は、これまでの the Well-Beloved による女性遍歴を回顧し、Avice 3 世が男と駆け落ちしたことで、自分が失ったものを、次のように確認し、惜しむ。

It was not the flesh; he had never knelt low to that. Not a woman in the world had been wrecked by him, though he had been impassioned by so many. Nobody would guess the further sentiment—the cordial loving-kindness—which had lain behind what had seemed to him the enraptured fulfilment of a pleasing destiny postponed for forty years. (III. -vii.)

つまり、Jocelyn Pierston はこれまで女性を恋し、愛したことはあるが、女性を傷付けたことはないと思っている。⁴⁾ また、Avice 3世と結婚しようとし、果たせず、失ったものは、40年間求め続けて来た、心底からの愛や思いやりによる魂の安寧だったと思ひ至るのである。このような気持ちは、しかし、死の床にある Avice 2世が理解できなかつたように、島人の誰も理解してくれないだろうと Jocelyn Pierston は思うのである。

(2) the Well-Beloved と結婚

Avice 3世との結婚によって、Jocelyn Pierston が得ようとしたのは、愛による魂の安寧だった。しかし一方で、愛のない現実の結婚の姿が、Avice 2世と Isaac Pierston との結婚などで描かれてもいるのは何故だろうか？例えば、島で Avice 2世を若者のように追いかけている40才の Jocelyn Pierston は、暗い道を歩いていく2人の人影を見て、Avice 2世と恋人かと思うが、男の口から出た喧嘩でもしているような声を聞いて、先日見た夫婦者かと思ひ込む。しかし、口論をしていたのは、既に法的結婚をしていた Avice 2世と Isaac Pierston だったことが後で明らかにされるのである。

更に、Isaac Pierston との間に出来た子を産もうとしている Avice 2世のもとに戻って来た Isaac Pierston は、終始不機嫌で無感動な様子に描かれ、Avice 2世を愛している Jocelyn Pierston と、法的に結婚しているのに、彼女を愛していない Isaac Pierston の二人は、...and they sat down, the lamp between them—the lover of the sufferer above, who had no right to her, and the man who had every right to her, but did not love her. (II. -xiii.) と描かれ、その後の2人の結婚生活も、経済的に向上したとはいえ、愛情あふれたものでは決してなかつたと説明されている。

また40才になった Jocelyn Pierston が、知的で解放された女性である Pine Avon 夫人との結婚へと進展する状況になって、逡巡する気持ちが次のように書かれている。

There had not been much harm in the flirtation thus far; but did she know his history, the curse upon his nature?—that he was the Wandering Jew of the love-world, how restlessly ideal his fancies were, how the artist in him had consumed the wooer, how he was in constant dread lest he should wrong some woman twice as good as himself by seeming to mean what he fain would mean but could not, how useless he was likely to be for practical steps towards householding, though he was all the while pining for domestic life. (II. -ii.)

彼に、彼女との結婚へと進むことを躊躇させるものは、彼には家庭を維持していく実際的な知識も技量もないだけでなく、女性から女性へと移って行く the Well-Beloved に象徴的に示されているように、愛は永続することが出来ないという認識である。⁵⁾

しかも、Avice 1世の訃報に接してから、Jocelyn Pierston の、長い間忘れていた、彼女への愛が一気に甦ってくることで作者自身の、妻との関係と酷似している。⁶⁾

作者は、自身の結婚生活の経験から、愛情は移り変わるのに、社会的に固定された結婚制度は不合理であると実感していた。結婚制度の不条理を強調するかのようにならぬように Jocelyn Pierston は、自分を愛していないと分かっている Avice 3世との結婚を、死を目前にしている Avice 2世の説得や、自分の財力や社会的地位の高さを利用して強引に推し進めようとする。結婚の不条理をこうして描くのは、結婚に対する作者の

実感が反映しているだけでなく、小説家として現実の姿を映そうという作者のリアリズムが勝っているからなのである。しかし、小説家としてのリアリズムとは別に、作者の1人の人間としての、切ない願望があった。結婚の現実には失望しながらも、この作品において作者は、Jocelyn Pierston が、Avice 3世との結婚を追求する姿を描くことによって、自らが求めていた、愛による魂の安寧を虚構の中で模索しようとしたのである。

(3) the Well-Beloved と個人主義

Jocelyn Pierston は、大人になった Avice 3世が、当時の島の女性としては高度の教育を受け、洗練された優雅な姿をしていることに惹かれ、Avice 2世を通して彼女に求婚する。その時の彼の言葉に、我々は大きな疑問を持たされる。

'.... Now, Avice, I'll to the point at once. Virtually I have known your daughter any number of years. When I talk to her I can anticipate every turn of her thought, every sentiment, every act, so long did I study those things in your mother and in you. Therefore I do not require to learn her; she was learnt by me in her previous existences. Now, don't be shocked: I am willing to marry her—....'
(III. -iii.)

Jocelyn Pierston は、Avice 3世と2～3回しか会っておらず、彼女とほんの少ししか話していないのに、彼女の気持ちや感情の動きが良く分かる。それは、昔から Avice 1世や、Avice 2世をずっと見てきたからだと言う。彼の言葉に我々が感じる疑問というのは、仮令、Jocelyn Pierston が、彼女の母や祖母を良く知っていたとしても、彼女たちと Avice 3世は違う存在なのであり、彼が彼女を知っていると思うのは間違いではないかということである。

Jocelyn Pierston は、Avice 3世との結婚を見越して、高級住宅街の家を入手する。そこに、Avice 2世と Avice 3世を招くのは、Avice 3世に、このような大きなアトリエのある立派な家の女主人になれたら…という気持ちを Avice 3世に持たせたかったからだ。しかし彼は Avice 3世が何を考えているのかは、余り問題にしていない。

He never knew exactly what she was thinking and feeling. Yet he seemed to have such prescriptive rights in women of her blood that her occasional want of confidence did not deeply trouble him.
(III. -v.)

つまり、Jocelyn Pierston は、Avice 1世の血を引く女たちに対しては当然与えられた権利を持ってでもいるかのように感じ、Avice 3世が時折示す不安そうな様子に余り心を煩わすようなことはない。⁷⁾

Jocelyn Pierston は、一定の教育を受け、教養もある近代人として描かれているが、この時点ではそのような資質は背後に隠れ、彼自身、古代以来連綿と続いてきた血筋の1要素としてのみ考え、行動しており、そこでは個個人の区別の認識は存在していない。従って Avice 3世独自の人格や気持ちを思いやることが出来ず、Avice 1世や、Avice 2世との関わりの中でしか考えることが出来ないのである。何故 Jocelyn Pierston は、Avice 3世を1個人として認めず、彼女の1人の女性としての気持ち斟酌してやることが出来ないのだろうか？この問題について、次章で考察して行くことにする。

(4) the Well-Beloved と故郷の島、及び島人

作品中で、Jocelyn Pierston の出身地ビンディリア島 Vindilia Island 或いは、the Home of Slingers (石投げ人の故郷) (I. -i) と the Well-Beloved との関係が度々言及されている。以下の引用はこの島の人達の永年に亘る生活習慣が、Jocelyn Pierston の性格を形作ったこと、従って、彼の奇矯な行動もそれに由来していることを説明している。

Why was he born with such a temperament? And this concatenated interest could hardly have arisen, even with Pierston, but for conflux of circumstances only possible here. The three Avices, the second something like the first, the third a glorification of the first, at all events externally, were the outcome of the immemorial island customs of intermarriage and of prenuptial union, under which conditions the type of feature was almost uniform from parent to child through generations: so that, till quite latterly, to have seen one native man and woman was to have seen the whole population of that isolated rock, so nearly cut off from the mainland. His own predisposition and the sense of his early faithlessness did all the rest. (III. -ii.)

この引用の主旨は、昔から続いて来た、島に住む少数の人達の間での結婚とか、婚前交渉が、この島独特の風潮を形作っていること、だから、個々の夫婦を見ても、その島の人々全体の傾向が類推できるし、Jocelyn Pierston 自身が、Avice 1世を捨てた原因もそこに見出せると説明していることである。

Jocelyn Pierston は、早くから彫刻家としての才能を認められ、今ではロンドンやヨーロッパ大陸の諸都市で学び、且つ創作活動をしている。そのような彼も、生まれ育った島を忘れることが出来ない。それどころか、A. R. A. (英国王立芸術院会友) の称号を既に得ている40才の彼も、Avice 1世の死後、ロンドンに戻り、彫刻家としてのいつもの生活を再開した後でさえ、島とそこに住む Avice 2世のことが忘れられず、テムズ河畔の埠頭に頻繁に通って、島から船で運んで来られる石を眺め、懐郷の思いにロンドンにいることを忘れる。また、60才になった彼は、ローマで石像などを見ると、故郷の島の石切り場を想起するほど、望郷の念を強く持っている。それ故に、上流階級の女性である Nichola Pine-Avon 夫人の求婚を拒絶し、島の洗濯女にすぎない Avice 2世との結婚を追求する。“理性”では自分の愚かさを十分に理解していながらも、Pine-Avon 夫人の全身より Avice 2世の指先を欲する気になる。彼は、上流階級の安楽な生活を捨てて、島の洗濯女と島で暮らす方を取る。Avice 1世の死を知った彼が、友人の Sommers の諫言にも耳を貸さず、島に帰り彼女の埋葬に立ち会うのは、その表れである。彼の中には、社会的名誉、安楽な上流階級の一員としての生活さえ否定するような故郷の島に住む女性への強い愛が存在する。この力は、傍目には愚かに見えるような行動を彼に取らせるのである。

Jocelyn Pierston は、何故、島の女性以外を永続的に愛せないのだろうか？この疑問に対する答えと考えられる文章が第Ⅱ部第3章に書かれている。

He began to divine the truth. Avice, the departed one, though she had come short of inspiring a passion, had yet possessed a ground-quality absent from her rivals, without which it seemed that a fixed and full-rounded constancy to a woman could not flourish in him. Like his own, her family had been islanders for centuries—from Norman, Anglian, Roman, Balearic-British times. Hence in her nature, as in his, was some mysterious ingredient sucked from the isle; otherwise a racial instinct necessary to the absolute unison of a pair. Thus, though he might never love a woman of the island race, for lack in her of the desired refinement, he could not love long a kimberlin—a woman other than of the island race, for her lack of this groundwork of character. (II. -iii.)

つまり、島の女性 Avice には、何世紀にもわたって「島から吸収され、培われてきた要素」‘ingredient sucked from the isle’がある。それは、同じ島で生まれ育った Jocelyn Pierston 自身にも共通するものなのだ。作者はそれを、島人の深部に共通して存在する「基本的特性」‘ground-quality’と呼び、その要素に欠ける故に「本土人」‘a kimberlin’を長く愛することは出来ないとして Jocelyn Pierston に自覚させる形で、読者に説明している。このように Jocelyn Pierston には、古い牢固とした島育ちの者に共通して存在する「基

本的特性 'ground-quality' が抜きがたくあるのである。

この特性 'ground-quality' は、人間を1個人として見る近代人としての資質と矛盾することになる。Jocelyn Pierston が Avice 3世を1個人として見れないのは、このような特性の中でしか、彼女を見ようとしなからである。Jocelyn Pierston の内部には、この古い「特性」とビクトリア時代の近代人としての性格が共存し、戦っている。彼が Avice 1世を深奥では愛しているのに、彼女を捨てて他の女性とロンドンに行ってしまうのも、Pine-Avon 夫人を捨てて、Avice 2世に求婚しようとするのも、この2つの要素の戦いがその時点で或る方向に決着したことの表れと見ることができる。彼の the Well-Beloved の一貫性のなさは、長い年月を経て伝わってきた「血」を有する人間の、ヴィクトリア時代に生きる近代人への脱皮のための葛藤の表れなのである。

また、作者は、Jocelyn Pierston の恋心が、「本土人」 'a kimberlin' に対して長続きしない理由を更に補強するために、この「基本的特性」 'ground-quality' に、熱しやすく冷めやすいと言われる「ローマ人の血筋」 'a Roman lineage' が島人に伝わっていると付け加えている。故にこの作品では程度の差はあれ、Avice 1世や Avice 2世、そして Avice 3世も、異性にすぐ心を奪われる存在として描かれているのである。それは特に Jocelyn Pierston に、それまで15人もの男性を恋することになってしまっていたと告白する Avice 2世の例で示されているのである。

(5) 島人に伝わる血とヴィクトリアニズム

Jocelyn Pierston の内部には矛盾がある。「基本的特性」 'ground-quality' を互いに持っている故郷の島に住む女性への強い愛が存在しているはずなのに、彼は「島の女はどうしても愛せないかも知れない」 'he might never love a woman of the island race' (II. -iii.) と考える。それはなぜだろうか？

その疑問を解明するてがかりは、上記の引用の次の「島の女は望ましい洗練に欠けているので…」 '...for lack in her of the desired refinement,' という表現にある。つまり、Jocelyn Pierston に矛盾を生じさせているのは、彼の中に「洗練された女性」を望む気持ちがあるからである。この気持ちが、本来彼の深部にある島人の「基本的特性」 'ground-quality' と矛盾・葛藤を起こしているのである。

それが、この作品の冒頭に示される。島に久しぶりに帰った Jocelyn Pierston は、Avice 1世の、島の娘らしい率直で甘美な愛情表現により歓迎される。ところが、3～4年前に島を去って、ロンドンやヨーロッパ大陸の都市などで、彫刻家としての才能を認められつつあり、社交界にも出入りし始めていた彼には、彼女の振舞は、違和感があった。世に認められ、島にいた頃よりは進歩して、洗練されたはずの自分を否定されたように感じたのだ。それ故気まずい思いをするのである。このような彼の意識は、その後、彫刻家として更に世に認められ、A. R. A. (英国王立芸術院会友) の称号を得、その上、父の遺産を受け取り、経済的にも安定すると、より高じていくのである。

そのような Jocelyn Pierston を Avice 1世は「冷たくて横柄だったわ。…今では、社交界の人なの—もう全く島の人ではないの」 '...Cold and haughty. ..., he's such a fashionable person now—not at all an island man.' (I. -i.) と評している。教養、地位・財産を有する人間の尊大な態度は、Avice 2世に対するとき、より顕著になる。

Avice 2世と初めての会話をしながら Jocelyn Pierston は、次のように感じる。

The voice truly was his Avice's; but Avice the Second was clearly more matter-of-fact, unreflecting, less cultivated than her mother had been. This Avice would never recite poetry from any platform, local or other, with enthusiastic appreciation of its fire. There was a disappointment in his recognition of this; yet she touched him as few had done :.... (II. -iv.)

Avice 2世は教養がなく、実際的で物事を割り切って考え、Avice 1世のように詩を朗読するようなこととはないだろうと思うと Jocelyn Pierston は失望する。

彼は、自分が Avice 1世を捨てたこと、それゆえ、苦しい生活を余儀なくされた Avice 1世に育てられた Avice 2世は、十分な教育を受けることが出来なかったし、彼に会ったときは母より美貌だったとはいえ、母が死んだ今では洗濯女として自分の生活を支えなければならない状況に置かれていることに対する自責の念を殆ど感じていないのである。それどころか、Avice 2世の住まいのみすぼらしさを見て、彼女の貧しさが彼女を、彼により近付けさせることになる、密かに喜ぶのである。

そして、40才の彼は、Avice 2世の美しさに引きつけられ、彼女は Jocelyn Pierston の the Well-Beloved の具現者となる。教養のない Avice 2世をロンドンに連れて行こうと思う彼は、心の中で「2人の年齢の不釣り合いは大したことではないし、彼女を自分好みの女に育ててから、わがものにしよう…」‘...there was nothing extravagant in the discrepancy between their ages, and ..., after shaping her to himself, to win her. (II.-x.)」と考える。「自分好みの女」とは、ここでは、社交界に出しても恥ずかしくないような洗練・才芸を身につけた女のことであろう。これはそのままヴィクトリア時代の上・中流階級男性の女性観であり、彼はそのような立場から島の女性を見るようになっていたのである。故に、Avice 2世に「あなたほどの女性が、ただの石工などに熱を上げるとは！」‘A girl like you to throw yourself away upon such a commonplace fellow as that quarryman! (II.-xii.)」などと（自身、石工の息子なのに）言い、また、後に Avice 2世が既に他の男と法的に結婚していたことが分かると、無理やり彼女を島に連れ帰る。そして愛情の有無など問題にせず、別れていた2人を一緒にし、男を職に就けてやって、島を去る。

更に、Avice 2世を通して Avice 3世に求婚する彼の言葉は「僕は…彼女をかなり裕福にしてやれるよ、そして、彼女のしたいことを何でもさせてあげられるよ」‘I can make her comparatively rich,...., and I would indulge her every whim.’ (III.-iii.) というものであった。彼の社会的地位の向上は、このように、生まれ育った島の人達を見下し、女性を非理性的な存在と見る上・中流のヴィクトリア時代の紳士の意識を彼に持たせることになっていたのである。

しかし、島に生まれ育った Jocelyn Pierston の深部に存在する「基本的特性」‘ground-quality’ は不変である。表面的にはヴィクトリア朝の上・中流階級の意識に染まっても、社交界のパーティなどに出席すると、そこで展開される恋の駆け引きとか、政界の話題のくだらなさを彼は批判的眼差しで見ることができる。前首相なども出席する上流社交界に出席した彼は、Pine-Avon 夫人と次の様な会話をする。

‘...The pity is that politics are looked on as being a game for politicians, just as cricket is a game for cricketers; not as the serious duties of political trustees.’

‘How few of us ever think or feel that “the nation of every country dwells in the cottage,” as somebody says!’ (II.-i.)

Jocelyn Pierston は、政治家たちの多くは、国民から負託された議員としての神聖な義務を真剣に果たそうとせず、政治を政党間の勝ち負けだけの、まるでクリケットのゲーム程度のものと考えていると批判し、Pine-Avon 夫人も、政治は多くの庶民のためになされなければと、ある政治家の演説の一節を引いて同感の意を示している。⁸⁾

このような2人の会話は、Jocelyn Pierston がまだ庶民としての批判精神を失っていないことの証左である。深部に存在する「基本的特性」‘ground-quality’ は、芸術活動を通じて上流社交界に出入りするようになった Jocelyn Pierston の上流意識と矛盾葛藤を起し、その結果、彼の言動は一貫しない。それにより、彼は回りの人々を傷付けるのである。

Ⅲ. the Well-Beloved と老化

(1) 老化を阻止するものとしての the Well-Beloved

Avice 3世との婚約が成立した翌朝、Jocelyn Pierston は朝の光の中で、鏡に映る自分の顔を見て愕然とする。その顔はそれまで自分が思っていたより20才程も老け込んでいたのである。

While his soul was what it was, why should he have been encumbered with that withering carcass, without the ability to shift it off for another, as his ideal Beloved had so frequently done? (III.-iv.)
 気持ちは昔のままなのに、何故このようなしわくちやの死体のような姿に自分の目的の達成を阻まれなければならないのか。これまでは、あの the Well-Beloved が他の女性へと乗り移ったように、この老駟を別の若い体と替えられないのか？ 60才になり、精神的にも肉体的にも理想の女性が現れ、遂に婚約に漕ぎ着けたのにと、Jocelyn Pierston は嘆く。この引用にあるように、the Well-Beloved は、それまでは彼の気持ちを若く保ち、外観も年齢より若々しく見せるのに役だっていた。上流社交界のパーティに出席した40才の Jocelyn Pierston を主人役の伯爵夫人が 'young man' (II.-i.) と呼びかける場面がある。彼は40才になっても、いつも回りの人からは若者のように見られていたのである。

Avice 2世に惹かれている40才の彼は、まるで20才の若者のように、彼女を追いかけ回すが、そのような自分を Jocelyn Pierston は複雑な思いで振り返ってみる。

In his heart he was not a day older than when he had wooed the mother at the daughter's present age. His record moved on with the years, his sentiments stood still.

When he beheld those of his fellows who were defined as buffers and fogeys—imperturbable, matter-of-fact, slightly ridiculous beings, past masters in the art of populating homes, schools, and colleges, and present adepts in the science of giving away brides—how he envied them, assuming them to feel as they appeared to feel, with their commerce and their politics, their glasses and their pipes. They had got past the distracting currents of passionateness, and were in the calm waters of middle-aged philosophy. But he, their contemporary, was tossed like a cork hither and thither upon the crest of every fancy, precisely as he had been tossed when he was half his present age, with the burden now of double pain to himself in his growing vision of all as vanity. (II.-vi.)

年齢を重ねても、意識は昔のまま、回りの同年代の者たちは家庭や職場で安定した地位に就き、精神的にも安定している。ところが自分は精神的に今だに若者のように不安定なのだ。40才の彼は、恋する19才になる Avice 2世を思うと、もっと若返りたいと思う一方、同年代の人々を見ると、あのよう年齢相応に落ち着きたいとも思う。若返りたいと思う気持ちは、60才になり、Avice 3世に惹かれるようになると、さらに強くなる。若返られるなら、「悪魔」'Mephistopheles' (III.-ii.) に魂を売ってもよいとさえ思う。このように、女性を恋する思いが Jocelyn Pierston を「60才の若者」'a youngman of sixty' (Part Third の題名) にしているのである。⁹⁾

(2) the Well-Beloved と老後の愛

鏡に映った自分の皺だらけの顔に衝撃を受けながら、それでもなお Jocelyn Pierston は、Avice 3世との結婚話を進める。彼をそれまでに駆り立てたものは何であろうか。

この疑問を解く手がかりは、A. R. A. (英国王立芸術院会友) の称号を既に得ている40才の彼でも、精神的に落ち着けない状態だったと説明されている文章に認められる。

He prospered without effort. He was A. R. A.

But recognitions of this sort, social distinctions, which he had once coveted so keenly, seemed to

have no utility for him now. By the accident of being a bachelor, he was floating in society without any soul-anchorage or shrine that he could call his own; and, for want of domestic centre round which honours might crystallize, they dispersed impalpably without accumulating and adding weight to his material wellbeing. (I.-ix.)

つまり、彼は名誉と地位を手にいれたが、それでも満たされていない。それは「魂の停泊地」‘soul-anchorage’がないために、折角手にいれた名誉をも喜び合える愛する家族が存在しないので、空しく消え去ってしまうというのである。

若くして、芸術家としての地位と名誉を手にいれた彼が、長い間求めていたのは、心からの愛と思いやりに包まれた「魂の停泊地」‘soul-anchorage’としての家庭であった。60才になって出会った Avice 3 世は、祖母の教養と、母の美しさを受け継いだことで、彼の望んでいた要素をほぼ完全に具備しており、彼の理想的な島の女性だった。その彼女と「心の底からいたわり合える愛情に満ちた」‘the cordial loving-kindness’ (III.-vii.) 結婚をし、家庭を持つことが、今では遅すぎたとは言え、60才の Jocelyn Pierston の切なる願いだったのである。¹⁰⁾

(3) 老化の絶対性と the Well-Beloved 喪失

the Well-Beloved は、Jocelyn Pierston に若い気持ちを持ち続けさせ、年齢より若く見せる要因だった。しかも、芸術活動を通して上流社交界などに入出入りするようになり、知的で美しい女性 Pine-Avon 夫人の愛を拒絶するほど、彼を強力に支配するものでもあった。

しかし Jocelyn Pierston の一生を通じて彼を支配し続けた the Well-Beloved も、老いの絶対的な力には勝てなかった。精神的に若々しいと思っても、肉体的には確実に老化し続けることを、いかに the Well-Beloved でも阻止することは出来なかったのである。

朝の光の中で、60才の Jocelyn Pierston の老いた容貌を見て衝撃を受けた Avice 3 世は、瀕死の床にある母 Avice 2 世を、そのままにしてジャージー島出身の青年 Henri Leverre と駆け落ちする。Avice 2 世は、その夜明けに亡くなり、居合わせた Jocelyn Pierston は、成り行きで Avice 2 世の葬儀を司ることになる。彼女の埋葬時に降った激しい冷雨に打たれた彼は、高熱を伴う危険な病気になり、ロンドンの住まいで生死の境を彷徨う。ようやく危険な状態から脱した彼は、看病してくれていた女性が、昔一緒に駆け落ちした、父の商売敵の娘 Marcia Bencomb だったことを知る。

危篤状態から回復した Jocelyn Pierston は、自己の内部で、ある変化が起こっているのを感じる。熱病は彼からそれまであったものを取り去り、別のものを残していったのである。

The artistic sense had left him, and he could no longer attach a definite sentiment to images of beauty recalled from the past. His appreciativeness was capable of exercising itself only on utilitarian matters, and recollection of Avice's good qualities alone had any effect on his mind; of her appearance none at all. (III.-viii.)

これまで彼を支配し続けてきた、the Well-Beloved が去り、それによって、あの芸術的感覚や、女性の美に対する執着心が彼から去って行き、現実的な問題のみに関心を示すようになっていたのである。だから、Marcia Bencomb がうっかり口を滑らせて「Avice 3 世が驚くばかりに美しいから、彼女の義理の息子 Henri Leverre が、彼女に心を奪われたのも当然と思った」と言ったときでも、あっさりと彼女に同意し、「…それより彼女は、やがて良い主婦になる賢い娘だ…」‘...She's more—a wise girl who will make a good housewife in time...’ (III.-viii.) と、実的な面だけを強調して応えるのである。

Jocelyn Pierston の鋭い美的感覚 ‘sensuous side of Jocelyn's nature’ (III.-viii.) がなくなり、彼は看病

してくれた Marcia Bencomb にも「あなたが美しくないほうが良かったのに」‘...I wish you were not handsome.....’ (III.-viii.) と言う。そして、それまでいつも彼女が、その顔を被っていたベールなどをとって見せてくれと頼む。ベールを取った彼女が年齢の割に美しいのを見てがっかりする Jocelyn Pierston だったが、翌朝化粧を落としてきた彼女の年齢相応に老けた容貌を見て、彼はほっとし、素顔を見せてくれた彼女を賞賛するのである。彼女はそれに対して「ちょっとばかり正直になっただけですよ」と言い、「もうこれから化粧はしない」と言う。ここに作者の、上流階級の化粧にうつつを抜かしている女性たちに対する批判の目が表れている。

若かった頃は高慢だった彼女も、このようにして Jocelyn Pierston が the Well-Beloved を失った状況に応じる形で、彼の精神的位置に近付き、島に帰り、近くに住むようになる。

いつも 2 人一緒に散歩する様子を見た島人たちは、2 人は結婚すべきだと言いだし、そのほうが経費の点からも好都合と 2 人は遂に結婚する。すっかり老人風になった Jocelyn Pierston は、Avic 3 世が離婚したいと言ってきた、「結婚 1 年にもならないのにそんな事を…。20 年もしたら彼女の意見はまた別になってるだろう…」と彼女の離婚の意思を初めから問題にしない。ここに現実的になった Jocelyn Pierston の現実肯定の保守的な姿勢が示されている。同時にそういう立場に対する作者の批判も読み取れる。晩年の彼は、島で昔から利用されていた井戸を水道に変えるために私費を投じたり、遅れていると思われる島の生活の近代化に尽力していると書かれている。Jocelyn Pierston はそれまでの「非現実的な」‘imaginative’ な生活と正反対の現実的な生活を、ビクトリア時代の大方の紳士と同じように、送るようになっていたのである。

IV. 作品の中で追求されているもの

(1) この作品に対する時代の影響

The Well-Beloved はビクトリア時代の影響下で書かれた作品である。ビクトリア時代は、Jocelyn Pierston が晩年過ごしたような現実主義が主潮となっていた。一方、そういう傾向に対する反発が時代の底流としてあったのである。1873年に Walter Pater (1839-1894)¹¹⁾ が、*Studies in the History of the Renaissance* を世に出し、1885年に *Marius the Epicurian* が出る。彼はその後も唯美主義を主張した評論を出し続け、それらが世の、現実主義的傾向に辟易していた若者たちの歓呼をもって迎えられたのである。その代表的存在が、Oscar Wilde (1854-1900) であった。彼は「芸術のための芸術」を最も派手に主張し、かつ実行した。しかし彼は、Pater が示した ‘intellectual enjoyment’ を避け、世間の人々が眉をしかめるような服装をして官能的・享樂的生活を送ったのである。彼の小説 *The Picture of Dorian Gray* (1891) は、彼の生活や主張が一定程度反映したものである。

その翌年の1892年の10月から12月にかけて *Illustrated London News* に連載の形で初めて世に出された Thomas Hardy のこの作品は、このような状況の下に書かれたもので、多かれ少なかれその影響を受けている。¹²⁾

しかし、この作品では Oscar Wilde の作品のように、主人公は快樂主義的な生き方をしていない。彼はそのような風潮にすぐ同調するような年齢ではなかったし、性格や出身階層が Oscar Wilde とは余りにも懸け離れていたのである。Peter Widdowson は、Hardy の描く人物の多くは不安定な社会的地位にいと述べているが、それは、彼が産業革命の荒波に揉まれる多くの人々を目にし、そのような彼等に同情の念を持っていたからである。¹³⁾

彼の場合、ビクトリア時代の2つの流れは、一方はイギリス南部の島の人々に伝わるラテン的血筋を持つ男の imaginative、非現実主義的な芸術的生活という形で表され、現実主義的傾向は、まさに Jocelyn

Pierston が、重病を経て Jocelyn Pierston らしくなくなった晩年の生活に反映させる形をとった。この時点で Jocelyn Pierston は事実上死んでいる。つまり、作者は現実主義的傾向は人間が死んだ状況に等しいと見做していたのである。¹⁴⁾

(2) the Well-Beloved と Thomas Hardy

Thomas Hardy は、1840年イギリス南部の片田舎で石工の親方の長男として生まれ育った。ビクトリア時代中期のイギリス南部の片田舎にはまだまだ古き良き伝統が残っていたが、それらも産業革命の嵐を避けることは出来ない状況になっていた。Thomas Hardy が、破壊されていく農村社会の現状に心を痛めていたことは、その小説や評論の中に多く見出される。当時の世相、快楽主義、退廃的風潮には必ずしも同調しなかったのはそのような彼の出身、憤りやや哀しみが原因となっている。

これまでの考察から the Well-Beloved とは、まず第1に恋愛と、それを昇華した芸術創作の衝動となるもの、第2にビクトリア時代の現実主義・功利主義を越えるもの、第3に結婚制度など、人口的・社会的な拘束を生(性)の衝動の面から否定するものとまとめることが出来る。つまり、Vindillia Island に住む人たちに長年伝わって来た情熱的なラテン的「血筋」がそのような形で表れているのである。

ビクトリアニズムの“教養”や社会の因習など、人口的なものより the Well-Beloved の方が根強いという描き方は、キリスト教会の影響がそれほど強くなかった土地柄に育ったとか、ラテン的気質を有する彼自身のヘレニズムの世界観=生(性)の謳歌が反映している。¹⁵⁾ しかし、ビクトリアニズムの“教養”や社会の因習など、人口的なものより強い the Well-Beloved だが、絶対的な老い、死には抗することはできない、というのも彼の認識だったのである。1897年版では、現実主義・功利主義に妥協した面はあったが Oscar Wilde のように、当時急激に持てはやされた傾向にそのまま同調せずに彼は、老い、死は誰も避けることが出来ない。それから目を逸らしてはいけないと、この作品で訴えているのである。

注

- 1) Harold Orel, *Thomas Hardy's Personal Writings* (1966; rpt. U. S. A. Univ. of Kansas Press: London, Macmillan Co. Ltd., 1967), pp. 36-37.
- 2) Raymond Chapman, *The Language of Thomas Hardy* (1990; London, Macmillan Education Ltd.), p. 14.
Desmond Hawkins, *Hardy; Novelist & Poet* (1976; U. K., David & Charles Ltd.), p. 119.
Desmond Hawkins は、作者がこのストーリーを、フランスでの実話から採ったと伝えている。
- 3) 本論の作品原文からの引用は、すべて *The Well-Beloved* (1986; rpt. Oxford, Oxford Univ. Press, 1991) による。
- 4) しかし、Jocelyn Pierston 自身が Avic 2世の掴みがたい態度によって精神的に苦しんだように、Jocelyn Pierston に裏切られた女性たちが精神的に深い苦痛を受けたであろうことは、ここでは言及されていない。作者はこう書くことによって、Jocelyn Pierston の精神性、純粹美の追求を強く印象づけようとしたのかもしれないが、皮肉なことに女性たちの精神の痛みを忘れてしまっているのである。
- 5) John Bayley, *An Essay on Hardy* (1978; rpt. Cambridge, Cambridge Univ. Press), p. 214.
John Bayley は、この作品は Hardy の実生活のパロディだと述べているが、この認識は、作者の実生活における Emma Lavinia Gifford との夫婦関係や、彼が目にした世間の夫婦の状況から来ている。作者が、その妻と不仲になった原因の1つとしては、実生活に於て、彼が多くの女性を恋したことが挙げられる。作者はこの作品の舞台となった「ビンディリア島」'Vindillia Island' の出身者ではないが、ラテン系の血を引いているのである。
- 6) Michael Millgate, ed., *The Life and Work of Thomas Hardy* (1984; London, The Macmillan Press Ltd.), p. 389. この伝記のみならず、多くの書に於て、それまでは余り夫婦仲の良くなかった Thomas Hardy とその妻 Emma だったが、

1912年11月に、Emma が亡くなると、彼女への愛情が急に甦ったのか、Thomas Hardy は彼女に捧げる詩を沢山書き、昔、彼女と初めて出会った Cornwall の St. Juliot などを再訪したと書かれている。

- 7) Dale Kramer, ed., *Critical Approaches to the Fiction of Thomas Hardy* (1979; London, The Macmillan Press Ltd.), p. 179. D. Kramer が指摘しているように、Avicé 3 世を見る Jocelyn Pierston は、Tess を見る Angel Clare のように、自分だけの観念 (Idea) で、彼女を見ているので、個人としての Avicé 3 世を認識することが出来ないという考えも成り立つ。いずれにしても、彼女の現実を無視しているという点では同一である。

Margaret R. Higonnet, ed., *The Sense of Sex; Feminist Perspectives on Hardy* (1993; U. S. A., Board of Trustees of the University of Illinois), p. 226.

一方、Margaret R. Higonnet のように、性の非個性という見方もある。この見方は、D. H. Lawrence の性の見方に近くなってくる。それゆえ Hardy を D. H. Lawrence の先行者と見る評者もいるのである。

- 8) 1858年10月29日にバーミンガムでなされたジョン・ブライト (John Bright) という政治家の演説の一節。彼はこの演説で「快適、満足、そして幸せは、多くの庶民に公平に」'a fair share of comfort, contentment, and happiness among the great body of the people' と強調している。

George Wotton, *Thomas Hardy; Towards a Materialist Criticism* (1985; Ireland, Gill and Macmillan Ltd.), p. 46.

- 9) Florence E. Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (1962; London, Macmillan & Co Ltd.), p. 32.

ハーディ自身、年齢より若く見られることがあったようである。そのような時感じた複雑な思いがここで表現されていると思われる。彼の2番目の妻が書いたと言われているこの Hardy の伝記には次のように書かれている。

His immaturity,..., was greater than is common for his years, and it may be mentioned here that a clue to much of his character and action throughout his life is afforded by his lateness of development in virility, while mentally precocious. He himself said humorously in later times that he was a child till he was sixteen, a youth till he was five-and-twenty, and a young man till he was nearly fifty.

また、若い Avicé 3 世を恋する余り、60才の Jocelyn Pierston は、「悪魔」'Mephistopheles' と取引してでも、若さを取り戻したいと切望するが、これは16世紀の錬金術師ファウスト博士の伝説を基にゲーテが1808年に著した戯曲の影響もあると思われる。

- 10) 60才の Jocelyn Pierston は、長い間求め続けて来た切なる願いを実現させるべく、Avicé 3 世との結婚話を強引に進めるが、作者は、そのような Jocelyn Pierston にも、20才にもならぬ若い彼女との結婚を無理に進めることに対する胸奥の痛み 'unpleasant sensations' (III. -iv.) があつたことを描き忘れてはいない。
- 11) 彼はその著書 *Studies in the History of the Renaissance* (1873) で「美のために美を愛好して恍惚たる時を一刻でも延ばしていくことこそ、やがては死ぬべき人間の持ち得る最高の叡知である」という意味のことを、次のように言っている。'...the love of art for its own sake, has most. For art comes to you proposing frankly to give nothing but the highest quality to your moments as they pass, and simply for those moments.'
- 12) Dale Kramer, ed., *Critical Approaches to the Fiction of Thomas Hardy* (1979; London The Macmillan Press Ltd.), p. 186. Dale Kramer は、この作品では唯美主義や Oscar Wilde の小説 *The Picture of Dorian Gray* が批判されていると述べている。
- 13) Peter Widdowson, *Hardy in History; A Study in Literary Sociology* (1989; London, Routledge), p. 210.
- 14) 1892年に *Illustrated London News* に連載されたストーリーでは、Jocelyn Pierston は自殺未遂をし、看病に来てくれた Marcia Bencomb と再婚するが、彼女の老醜と美しい Avicé 3 世の余りにも明らかな対照を目にし、彼がヒステリックに笑い出す。それと比較すると1897年版は、当時の世相により歩み寄ったものになっている。しかし、作者は主人公を「生ける屍」'living carcass' にしてしまっているのである。
- 15) Timothy Hands, *Thomas Hardy: Distracted Preacher?* (1989; London, The Macmillan Press Ltd.), pp. 90-91.